

誇れる北中の実現

できる! だれでも! どこまでも!



長い文を書くことだけではなく、読むことも苦手な子どもが増えています。読書や手習いが改めて見直されてくるでしょう。

先週は前期期末テストでした。いつも通り、子どもたちは皆頑張っていました。ところで、昔に比べると定期テストの回数が減ったと思いませんか。私が中学生の時は三学期制で、それぞれの学期に実力・中間・期末の三つの定期テストが「かったり」ありました。今からすればテストばかりだなと感じますが、当時はそれが当たり前でした。しかも、成績表には順位（教科も合計も一位から最下位まで）も当たり前に出ていましたし、上位五十名が掲示板に貼りだされるなど、なかなかシビアな「昭和」でした。

平成十年代に二学期制が始まり、大津町は確か平成十六年あたりに、菊池郡市内では最初に二学期制を取り入れました。こうして定期テストは一学期分減りました。そして、平成末期から令和の現在まで、全国的な傾向として、さらに回数を減らしたり、定期テストそのものを廃止する学校も出てきました。主な理由は評価方法に対する考え方の変化です。定期テスト偏重を改善し、もっと細やかに学習状況をみとめる必要があるという考えからです。そこで増えたのが単元テスト（小学校で実施しているようなテスト）です。回数が増えますが、単元テストの方がより細やかな学習状況の見取りが可能です。

本校でも、定期テストに加えて単元テストも実施している教科があります。ただ、定期テストは入試の疑似体験にもなるので、必要だという意見もあります。

こうしたテストの変化は他にもあります。昨年度の熊本県学力・学習状況調査や、今年度の町学力調査、全国学力・学習状況調査の英語科は、タブレットによるテストが行われました。これをCBT（Computer Based Testing）と言います。CBTの利点は、コストや手間などの実施者の利点と、受験の柔軟性や詳細な評価などの受験者の利点があります。

上の写真は、今回の二年理科のテストです。CBTで行われました。ひよっとすると、数年後には学校の定期テストも、これが当たり前になるのかもしれない。時代の変化と共に定期テストも変化していますが、同時に課題も生まれています。筆圧が弱い、たくさん文字を書くことに手指が耐えられない、書く姿勢がすごく悪いなどの「書けない子ども」が増えていることです。このことを問題視し、我が子を習字教室に通わせる親が全国的に増えています。利き手中指がペンだこで曲がり、小指や掌の側面が真っ黒になるほど書いていた昭和世代としては、大いに不安でもあるのです。